

座長解題：

日本農村の20世紀システム—現代社会経済理論による農村研究の再発見

近畿大学農学部 池上 甲一

歴史は断絶と連続の統合体である。断絶の視点に立てば、ある時代に共通する特性を括り出すことができるし、連続の視点に立てば底流を貫く社会動因を射程におさめることができる。日本の農業・農村も、断絶と連続の両面から、これまでに潜り抜けてきた変動の過程を捉えることができる。その中でも、20世紀における変動は、それ以前と比べると質的にも量的にもきわめて大きかったといえるだろう。土地生産性も労働生産性も飛躍的に向上したが、その一方で、あるいはそのゆえに、「国民経済」における農業・農村の位置は低下し、農民の主体性も後退しつつある。現在のまま推移すれば、21世紀に日本の農業・農村が存続できるかどうかさえ危ぶまれるほどの状況に立ち至っている。

そのような現実に対して、21世紀へのパースペクティブを開くためには、何よりも危機的状況に立ち至った経緯をきちんと総括し、その構図とメカニズムを明らかにしなければならない。その際に、経済的合理性と技術的合理性のみを肥大させた特殊な「生産力主義」が20世紀世界を覆い尽くしていたことに注意することが有功ではないだろうか。ここでは、同一規格、大量生産・（大量流通）・大量消費・（大量廃棄）、欲望の刺激といった経路による物質的生産力の拡大と、それが国、企業、家計（家、個人）の利益を予定調和的に高めるという「信仰」（共同幻想）と、そして政治や文化を含めて社会経済のあらゆる側面がこの「信仰」に適合するように編成される（総動員される）、その総体を「20世紀システム」として把握する。その上で、「20世紀システム」が日本農村においてどのように貫徹し、どのような意味を持ったのかを具体的に把握したい。

その際の留意点をいくつかあげると以下のようなものである。第1に、今回の各報告は、20世紀システムの分析を課題とする以上、歴史事象の取扱いが不可欠となるが、それは「新しい」事実の発見よりもむしろ広く知られている事柄を新しく解釈し直すことに力点がある。第2に、20世紀システムは暦年通りに1991年に始まり2000年に終わるのではなく、その特性が広く社会に共有されるようになった時に出現すると考える。したがって、20世紀システムは地域や問題領域ごとにタイムラグを伴って現れるだろう。そこで第3に、19世紀型システム、20世紀型システム、21世紀型システムといった区分が許されるとすれば、その間の連続性と断続性が問われねばならない。このため、各報告者には、極力、将来展望にもふれてもらうこととした。第4に、さまざまな社会経済的事象の底流にある20世紀システムを暴き出すことが共通テーマセッションの狙いのひとつであるが、その際に農業・農村が20世紀システムを受容していく「からくり」と、20世紀システムの駆動力としての主体的選択、つまり選び取るという意思の作用との両面から把握することに努めたい。第5に、このことはロゴスよりもむしろエトスやパトスに注目することによって明らかになるのではないか。このような視角に立つことによって、心情や身体に内面化された20世紀システムを解きほぐすことができるように思われる。

以上のような問題意識と方法論的留意点に基づきながら、テーマセッションの各報告を行う。第1報告は、フォーディズム概念によりながら、マクロレベルから課題に接近する（立川雅司「日本における20世紀農業食料システムとフォーディズム」）。第2報告は

地域レベルから課題に接近し、安城市の近代化過程を素材として特に「合理化」の内的メカニズムを明らかにする（岩崎正弥「安城地域における近代化過程の意味」）。第3報告は、目線を家族・個人に落とし、落合恵美子の近代家族論を援用して農村生活の変貌の中に20世紀システムを見出す（川手督也「農村生活の変貌と20世紀システム」）。第4報告は、農村から視点をずらし、山村を対象に取り上げて、地域区分つまり空間編成のあり方が20世紀システムの中で規定されてきたことを論じる（秋津元輝「20世紀日本社会における「山村」の発明」）。